

鳥取県人の北海道移住Ⅱ

期間／平成10年10月15日(木)～10月30日(金)
(土曜日は休館)



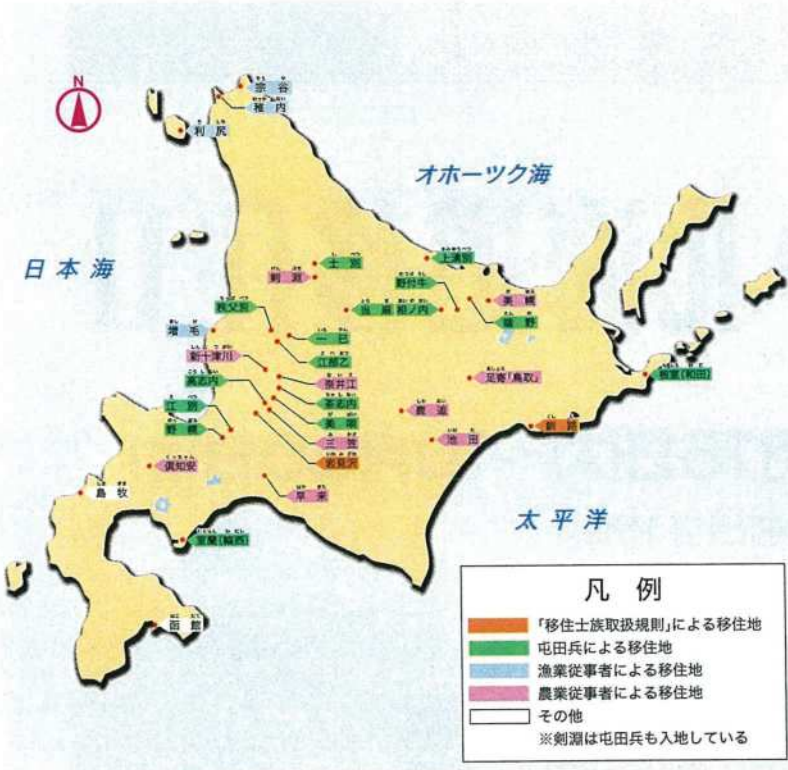
足寄あしよの鳥取小學校落成記念 (S5 個人蔵)

釧路市に鳥取村があったのは知られていますが、北海道には、これ以外にも鳥取と名づけられたところがあります。足寄もその一つで、明治43年(1910)、現在の気高町及びその周辺からの移住者によって開村されました。

はじめに

蝦夷地が北海道と改称された明治二年（一八六九）、明治政府はロシアの南下政策への対抗や殖産興業政策の一環として、北海道開拓を開始します。このため、全国各地から数多くの人々が北海道に渡りました。鳥取県では明治一〇年代末から県の主導による土族移住が開始され、これを契機として大正時代末までにおよそ七千二百余戸、二万七千余名（『北海道庁統計書』等により集計）が渡道しました。

今回は前回の展示以降に判明した新たな事実等をふまえて、釧路・岩見沢（「移住土族取扱規則」による移住）、江別・室蘭・根室・美唄（銃と銃による開拓を目指した屯田兵の移住）、池田（旧鳥取藩主池田家が開設した農場への移住）、倶知安（山陰移住会社が開設した農場への移住）、剣淵・足寄・早来・美幌など（農業従事者の集団移住）、利尻・稚内（漁業従事者の移住）を中心に紹介します。



鳥取県人の主な移住地

◆ 士族授産としての移住 ◆ ◆ ◆

士族救済のための北海道移住策は、鳥取県再置（明治一四年）後の県政重要問題の一つでした。時の県令山田信道は、当初二千戸の士族を北海道に移住させる計画を立てていました。県内士族の三分の一にあたる数です。これに対し、明治政府は、その半分の一千戸を許可しました。しかし、移住志願者総代として北海道に事前視察に出かけた足立長郷らが、各地でトラブルを起こしたことや、北海道開拓の政策方針が変更されたことなどの影響もあり、実際に移住したのは四四〇戸余りとなりました。



足立長郷 (1844~1920)
共進社社長で、鳥取県再置運動にかかわった人物としても知られる。



山田信道 (1833~1900)
鳥取県再置後最初の県令(後知事)。7年間の在任期間に県内道路を開設するなど、多大の功績をあげた。



鳥取士族北海道移住の儀につき農商務省内達 (M16 『官省内訓内達綴』所収)

移住志願者総代足立長郷らの視察中の行動を問題視している様子がうかがえる。このため農商務省は志願者の選定を厳重にするように指示している。



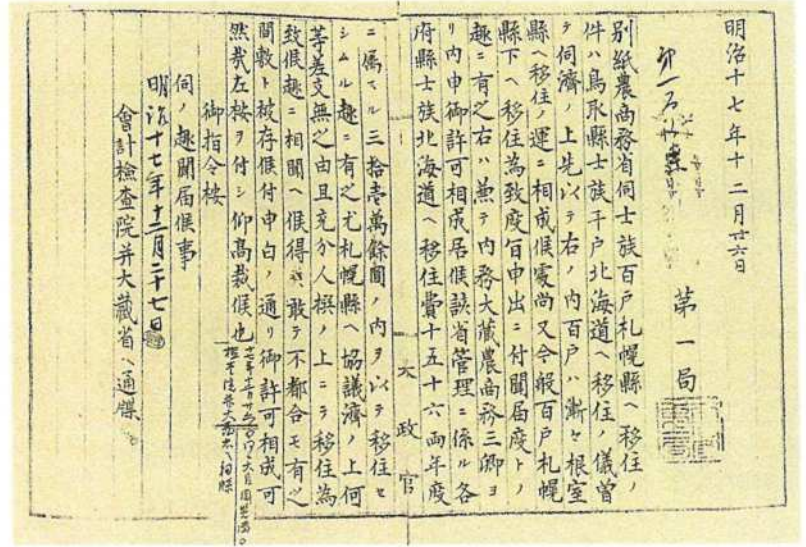
東神社 (岩見沢市 H8.6 撮影)

山地神社(山口県出身者建立)と鳥取神社(鳥取県出身者建立)が合併したものの。明治39年、改称の許可を受けた。出雲大社を勧請している。



東神社所蔵文書 (M33・M41 個人蔵)

『東神社御分靈録』(右)には、元鳥取神社創設許可の一件が記されている。鳥取市の樽谿神社を勧請している。



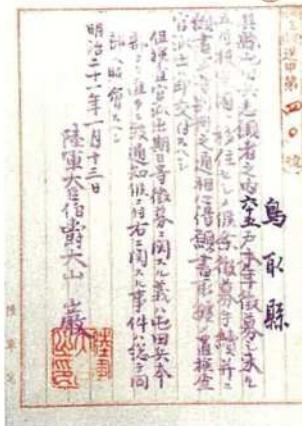
札幌県へ百戸移住の許可 (M17 『公文録』所収 国立公文書館蔵)

札幌県下岩見沢への移住許可に関する史料。岩見沢には明治17年(1884)から同18年にかけて山口県(136戸)、鳥取県(105戸)などから277戸の土族が移住した。当時の北海道は函館、札幌、根室の三県に分かれている。



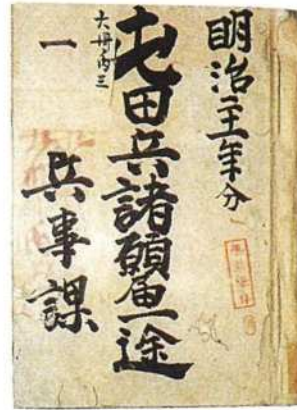
勤業派出所の鐘 (岩見沢市立東小学校蔵)

移住者には、土地、住居、農具などが貸与されていたため、開墾業務に厳しいノルマが課せられた。この鐘は、起業や止業を知らせた。



屯田兵募集の件につき陸軍省特達 (M21 『各省特達』所収)

根室(和田屯田兵村)への屯田兵募集に関する史料。屯田兵は明治15年まで開拓使の管轄であったが、以後、陸軍省に属した。



屯田兵諸願届一途 (M21 鳥取県立図書館蔵)
屯田兵移住許可関係の公文書綴。表題から6冊あったことがわかる。

◆屯田兵―銃と鍬による開拓―◆
屯田兵は北海道の防備と開拓の両方を義務づけられた移住者で、明治八年(一八七五)から同二三年までは、土族授産の一環として募集されました。その後は、土族以外からも募集が行われ、明治三十七年に廃止されました。『屯田兵村の百年』(伊藤廣著)によれば、鳥取県からは三六七戸の移住が行われていますが、これは、石川県、山形県、宮城県に次ぐものです。



服 (北海道開拓記念館蔵)
、騎兵服(中)、歩兵服(右)。



日清戦争(中)・日露戦争(左)の従軍記章と屯田兵手帳(右)
(根室市教育委員会蔵)
吉方村(現、鳥取市)出身の三谷松太郎が所持していた。



屯田兵々籍 (M22 江別市郷土資料館蔵)

野幌(江別)の屯田兵は、明治18年から同19年にかけて配置された。西日本の士族によって構成された最初の屯田兵村である。

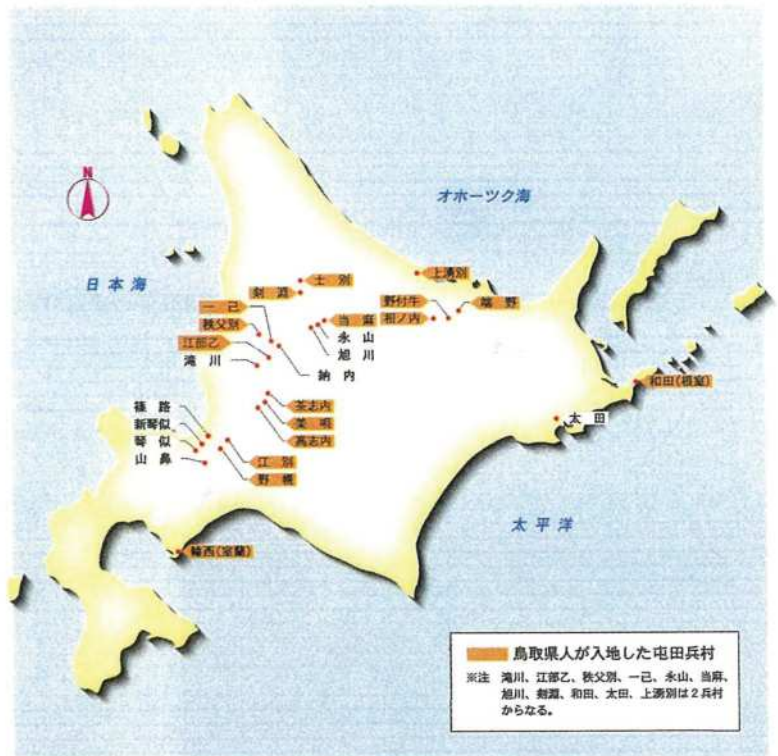


野幌屯田兵第二中隊本部 (H9.6 撮影)

野幌(江別)に残る屯田兵関係の遺構。野幌屯田兵村は、兵制上第二大隊第二中隊と称された。



輪西(室蘭)屯田兵村遠望 (M20 中嶋神社蔵)



鳥取県人が入地した屯田兵村

明治8年成立の琴似兵村から同32年成立の士別・剣淵兵村まで37兵村が存在する。このうち、鳥取県人が入地したのは23兵村にのぼる。



教員御採用願 (M20 『願書綴』所収 中嶋神社蔵)

出願者遠山聳は鳥取士族で、正墻薫や小畑稲升らに師事し、県中部で小学校の校長を勤めた経歴を持つ。



屯田騎兵 (M30頃 個人蔵)

大瀬村(現、三朝町)出身の横山庚馬は美唄屯田騎兵隊の本部で勤務した。



美唄屯田兵屋 (H10.7 撮影)

美唄は騎兵隊が配置された唯一の兵村である。各兵屋には厩舎が付設されていた。



屯田兵
大礼服

◆池田—旧藩主の農場—◆◆◆◆◆

旧鳥取藩主池田家を継承した侯爵池田仲博が、明治三〇年（一八九七）の「北海道国有未開地処分法」に基づき払い下げを受けた三百万坪に及ぶ農場で、当時の北海道庁長官北垣国道（旧鳥取藩士、池田家の相談役）がその成立にかかわっているようです。開墾業務は、おもに福井県や鳥取県（明治三二年段階で五七戸）からの入植者によって行われました。



山本一松から高島士駿宛書簡(部分) (M30 個人蔵)

農民の募集・輸送係を務めた山本は、池田家の家従であった高島(当時米子町在住、元隠岐島の郡長)に、募集の状況や農場の様子を書き綴っている。



池田農場裏

(M39 北海道大学附属図書館刊行『明治大正期北海道写真集』より転載)

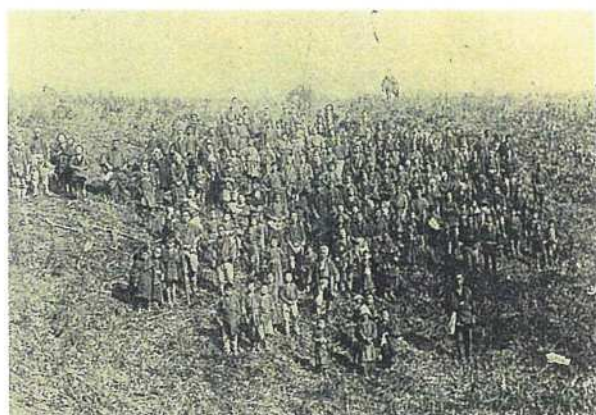


池田家から農場関係者に下賜された木杯

(池田町史編集室蔵)

◆倶知安—山陰移住会社の農場—◆◆◆◆◆

山陰移住会社は、明治二八年に石見国瀬摩安濃両郡（現、島根県大田市付近）の有志によって設立され、倶知安原野の未開地三百万坪の開墾を中心とする農場経営を行いました。農場経営者・開墾従事者は島根県人が中心でしたが、鳥取県からも明治二九年から同三一年にかけて約六〇戸が移住しています。移住には鳥取市の吉村家が所有した帆船聖徳丸も利用されました。



小作人集合の景 (M30頃 北海道大学附属図書館刊行

『明治大正期北海道写真集』より転載)

小作人には移住旅費、小屋掛料、農具種子及び1ヶ年間の食料が貸与され、開墾地5町歩が割渡された。



燕麦畑整地及播種の景 (M44 北海道大学附属図書館刊行

『明治大正期北海道写真集』より転載)

農場全地の開墾が終了した明治38年に農地の売却が議論され、翌39年、山陰移住会社は解散した。この写真は其の後の倶知安村の情景である。



北海道視察談話 (M30 北海道大学附属図書館蔵)

衆議院議員で会社重役を務めた恒松隆慶の視察報告書。第一聖徳丸の記述がみえる。



足立繁太郎 (1890~1986)

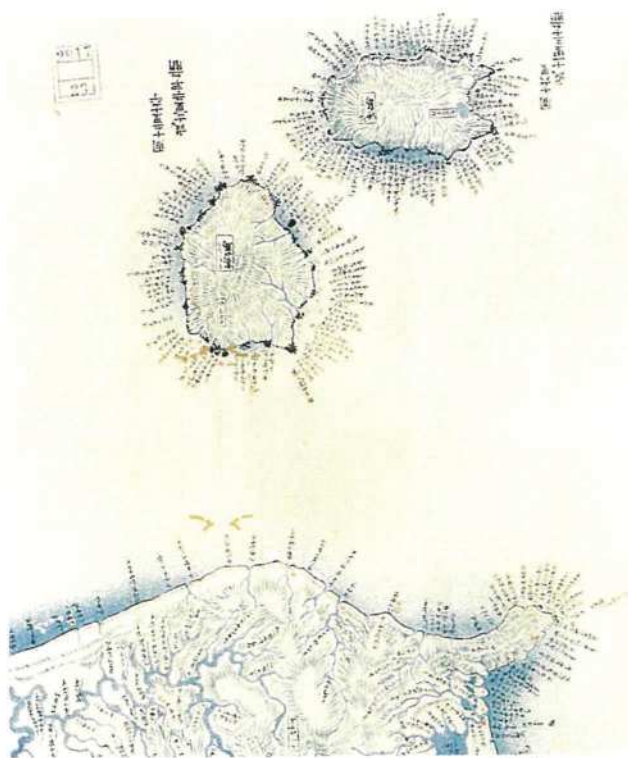
(年代不詳 個人蔵)

明治31年、浅津村(現、羽合町)より移住。馬鈴薯の改良に努め、名誉町民となる。

◆利尻・稚内―漁業従事者の移住―◆◆◆

明治二〇年代から同三〇年代の鯨漁の著しい発達とともに、北海道の日本海側には多くの漁業従事者が集まりました。鳥取県からも、主に東部の漁村から増毛、留萌、稚内、利尻、樺太などに移住しています。最北の離島の一つ利尻では、明治二〇年代初頭から移住が開始され、三〇年代にピークをむかえました。彼らは「因幡衆」と呼ばれ、島内四ヶ所に集住し、鯨漁や鯨粕製造業に従事しました。鯨が不漁となる明治三〇年代後半になると、「因幡衆」の中からタラバ蟹を利用した缶詰工場を創設する人物も現れ、利尻における新たな産業として定着しました。大正七年（一九一八）の統計によれば、移住者が最も多かった鬼脇村の人口のおよそ一割が「因幡衆」です。

対岸の稚内・宗谷地方には、明治二〇年代から明治末年にかけて六〇戸を越える移住者がありました。大半は漁業従事者で、利尻、樺太等からの再移住組も含まれています。この中には、漁場をもつ資本家となったり、土木業で成功をおさめた人物もでています。



東西蝦夷山川地理取調図（安政5 鳥取県立図書館蔵）

江戸末期の北方探検家松浦武四郎（1818～1888）が、幕府御雇の蝦夷地御用掛として東西・北蝦夷を探查して作製した地図の一部である。中央（方位は東）が利尻島、右下は野寒布岬。



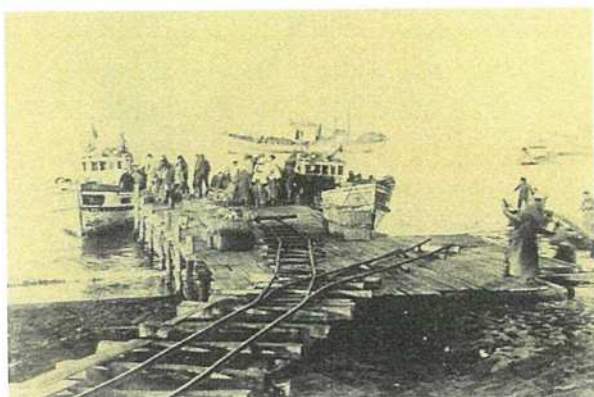
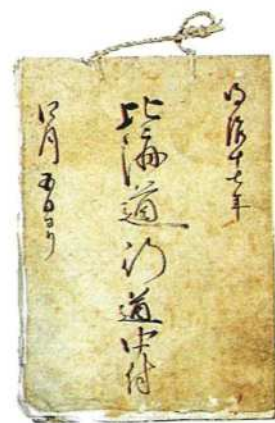
北海屋（年代不詳 『因幡の葉』より転載）

利尻で富を築いた田中家（甚六の子孫）が大正10年に鳥取市で開いた海産物の店。販売品は利尻の本店及び小樽出張所から直接送付された。



田中甚六と『北海道行道中付』（M17 個人蔵）

『北海道行道中付』は伏野村（現、鳥取市）出身の田中甚六が書き残した1年8カ月にわたる道中日記。小樽、増毛、礼文、利尻など道内各地を廻っている。帰鳥後、家族を伴い利尻に移住した。



兜丸の勇姿（S12頃 個人蔵）

オホーツク海に面する紋別港におけるタラバ蟹の水揚げ風景。兜丸は稚内に本社を置いた北海道缶詰株式会社が所有した漁船（8隻）で、船頭の大半は鳥取県人であった。

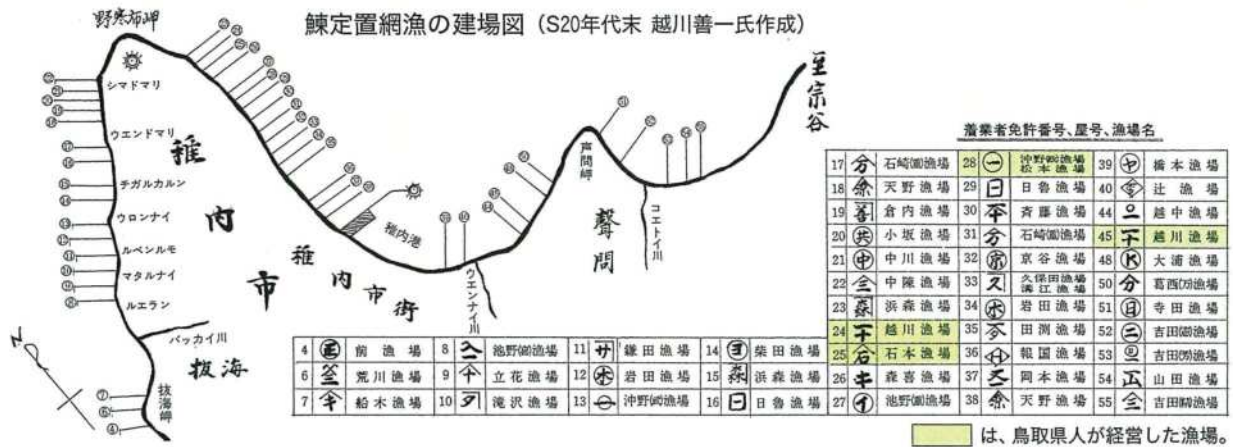


鯨場での作業風景（M45 利尻町立博物館蔵）

仙法志長浜地区（利尻）の鯨粕製造の様子。写真の裏書から秋里村（現、鳥取市）出身の伊佐田長蔵が経営した漁場であることがわかる。

鯨定置網漁の風景 一 稚内

明治以降の鯨の漁法は刺網漁と定置網漁に大別されます。定置網漁は網元の漁業といわれ、30人近い出稼ぎ漁夫らを使い、春に産卵のために接岸してくる鯨(群来と呼ばれる)を沖合いに設置した角網に誘い込み、捕獲しました。最後の群来が見られたのは昭和28年で、それ以後漁獲は激減しました。下の写真は賀露村(現、鳥取市)出身の越川家が経営した漁場です。



稚内港における鯨船積の風景 (S27 個人蔵、以下写真も同様)

沖合いに鯨の仲買船が停泊する。稚内で漁獲された生鯨は、岩内港(北海道)、酒田港(山形県)、新潟港等に運ばれ加工された。



鯨網起こし

俗に「攻め」と呼ばれる。定置網に入った鯨を産卵する前に枰船に送り込む作業である。定置網に産卵が行われると、その重みで網を起こすことが不可能となる。



沖の定置網に向かう起こし船(手前)と2隻の枰船(後方)

起こし船は鯨の入った定置網を起こす船で、30人近い漁夫が乗り込んだ。枰船は船底に鯨を溜め置く網をもつ船である。



汲み船が岸壁に着岸

汲み船は、海上で枰船に溜まった鯨を汲み上げ運搬する。



漁場に建てられた鯨御殿

鯨の群来を見ることができた。

◆北海道に渡った郷土の文化◆



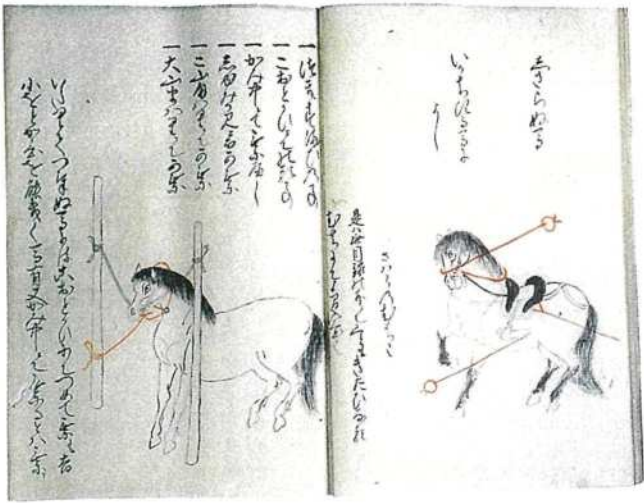
三笠山村岡山(現、三笠市岡山)の「因幡の傘踊り」(T4 個人蔵)
鳥取県からの移住者が伝えた。当時の傘は番傘を加工したものである。傘踊りは現在の美明市峰延、池田町にも伝えられた。



利尻に伝わる麒麟獅子・狷々面・猿田彦面(右)
(利尻町立博物館蔵)
鳥取県からの移住者によって、仙法志の長浜神社に奉納された。



標谿神社祭礼絵巻(部分)(鳥取神社蔵)
釧路移住者安田源治が所蔵していた。標谿神社は慶安3年(1650)、藩祖池田光仲が東照大権現を勧請したもので、祭礼は毎年藩をあげて盛大に行われた。



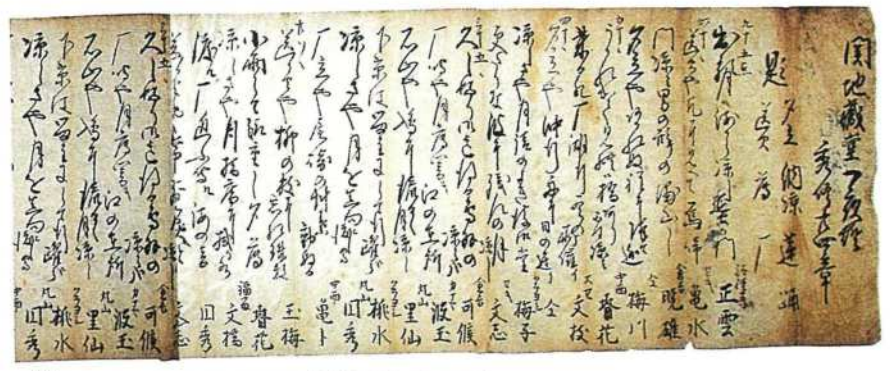
大坪流秘伝書(鳥取神社蔵)
美田家に伝わる馬術の伝書。渡辺数馬の子孫である美田家が、縁あって鳥取神社に寄贈した史料の一つ。



手鏡(鳥取神社蔵)
釧路移住者谷口久治の妻フサが愛用した。



矢立(鳥取神社蔵)
釧路移住者米原庄市が愛用した。(上)
釧路移住者藤代嘉彰が所蔵していた。(下)



関地藏堂一夜燈秀吟廿四章(部分)(個人蔵)
岩見沢移住者吉村織人が所蔵していた。文化文政期頃に関地藏堂(現、関金町の地藏院)で行われた句会の史料。吉村は倉吉組筆頭役を勤めた家で、史料中の倉吉暁雄が吉村氏である。



校章は「鳥」を意匠している。現在は廃校となっている。



足寄 鳥取小学校と鳥取橋 (H10.6 撮影)



利尻 道路改良記念碑 (H10.6 撮影)

今市村(現、鹿野町)出身の中田治郎吉の名前が刻まれる。明治30年(1897)、利尻に渡り土木業で成功する。子孫は稚内に再移住した。後方に見えるのは利尻山。



根室 屯田兵屋 (H9.11 撮影)

最東の屯田兵村に残った鳥取県からの移住者の廃屋。撮影の1カ月後に強風で倒壊した。



釧路 釧路市鳥取町合併記念碑 (H8.6 撮影)

明治17年に開村した鳥取村は、昭和18年(1943)に鳥取町となり、同24年釧路市と合併した。



池田 池田農場開放記念碑 (H9.6 撮影)

池田農場では、大正15年(1926)に小作人組合が設立され、農地開放運動が展開した。小作地の全てが開放されたのは、昭和15年である。



早来 開拓記念碑(下、裏側) (H8.10 撮影)

昭和44年に開基75年を記念して建立された。森下辰三郎は、明治18年岩見沢に土族と共に入植した師範農民である。

◆ 聖徳丸 — 北海道への定期船 — ◆

聖徳丸は、鳥取市の旧鑄物師町にあった吉村家が所有した帆船で、明治一〇年代後半から同三〇年代初頭にかけて山陰と小樽港を結ぶ定期船として、多くの人や物を運びました。吉村家は藩政時代に町庄屋を勤めた家で、明治四三年まで酢・酒の醸造業を営んでいました。ここで醸造された酢は牛ノ戸焼の四升入徳利に詰められ、北海道の各地に運ばれています。



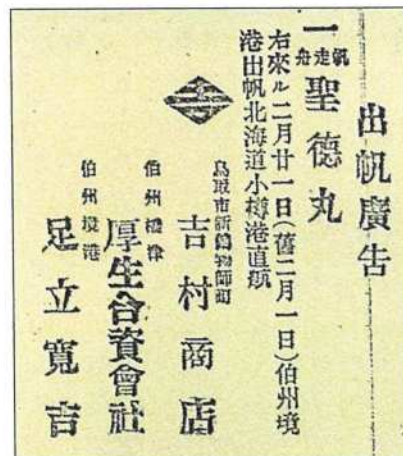
第二聖徳丸船旗（個人蔵）

吉村家が所有した船は2艘で、いずれも西洋型帆船であった。



奈井江に渡った酢徳利（2口 奈井江町蔵）

（右、裏側）「大極上々酢」と書かれている。



出帆広告（M31 『鳥取新報』所収）

■ おわりに

今回の展示会にあたり、以下の方々及び関係機関から資料の提供をはじめ多大の協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

北海道立文書館、北海道立図書館、北海道開拓記念館、北海道大学附属図書館、釧路市地域史料室、釧路市立博物館、鳥取神社、釧路鳥取報恩会、岩見沢市史資料室、岩見沢郷土科学館、岩見沢市立東小学校、江別市郷土資料館、根室市教育委員会、池田町史編纂室、室蘭市民俗資料館、中嶋神社、利尻町立博物館、利尻富士町史編纂室、奈井江町教育委員会、函館市立図書館、三笠市教育委員会、三笠市岡山傘踊り保存会、峰延東傘踊り保存会・後援会、俱知安町総務課、剣淵町西原親族会、国立公文書館、鳥取県立博物館、鳥取県立図書館、鳥取市博物館建設課、福部村教育委員会、鳥取女子高等学校社会部、東善寺、関秀志、丹治輝一、高嶋弘志、中野尚幸、鈴木春男、浪田博、石尾源治、朝倉一、吉村朝子、中山千恵子、山形国男、上村和也、山村公雄、北川陸、解良守、梶浦武、横山義明、安藤麻二、福田栄三、山内栄一、山内清二、川上淳、日下部正幸、片桐正一、勝谷亘、畑正平、西尾寿之、竹森勝太郎、尾崎肇、横山登美枝、石黒秀雄、森本久憲、田子正雄、西谷榮二、谷口豊次、岡本幸三郎、近藤寛、森本清栄、越川善一、松本清太郎、福沢幸之、足立俊雄、玉川良子、藤原忠雄、田中秀実、高島駿郎、吉村智恵子、山田董、森本政司、松尾茂、岡村吉彦、石原平之助、坂根善男、名越和範、川本収、小山富見男（順不同、敬称略）

平成10年度公文書展
鳥取県人の北海道移住Ⅱ

平成10年10月印刷・発行

編集・発行 鳥取県立公文書館
鳥取市尚徳町101番地
TEL(0857)26-8160
FAX(0857)26-8160

